阮籍の四言「詠懷詩」について

――その修辭的手法を中心として――

沼口　勝

序

五言の「詠懷詩」の作者である魏の阮籍（二一〇―二六三）、字は嗣宗に、十三首ないし十四首の四言の「詠懷詩」の存したことは早くから知られていたが[1]、その全貌が明らかにされることは從來なかった。

ところが、一九八四年三月、北京の人民文學出版社から重版された黄節（一八七三―一九三五）の『阮步兵詠懷詩註』（一九五七年四月初版）に、その「補篇」として、明の馮惟訥の『古詩紀』所收の三首を含む十三首の四言「詠懷詩」が、民國十九年（一九三〇）二月の日付をもつ識語と註とを伴い公表された。黄節の識語によれば、その舊藏の潘璁本は、明の嘉靖間の刻本を翻刻したもので、嘉靖癸卯（一五四三）の陳德文の序と崇禎丁丑（一六三七）の潘璁の序とをもつ上下二卷本であり、四言「詠懷詩」十三首を錄するという。黄節はこれを取って注釋し、「阮步兵詠懷詩註補篇」としたのであった。

ところで、蕭滌非氏は、その「讀阮嗣宗詩札記」（『讀詩三札記』所收一九五七年、作家出版社）に、「嗣宗五言詠懷詩八十二首外、尚有四言詠懷詩十三首。惟近人丁福保所編全三國詩僅有其三、黄節先生出其舊藏潘璁本復爲注釋、於是吾人乃得窺嗣宗之全豹。對茲碩果、彌覺可珍矣」と記し、黄節の四言「詠懷詩」に對する貢獻を傳えている[2]。

それにしても、十三首の四言「詠懷詩」の再現が、今後の阮籍研究・四言詩研究に重大な意義を有するものであることは、疑いのないところであろう。私の見るところ、これらの作品には、特色ある修辭的手法が用いられている。本稿は、若干の詩を例としつつ、四言「詠懷詩」に通貫している手法の解明を期するものである。

一

四言「詠懷詩」に用いられている阮籍の手法は、おおよそ次の三種に分けることができるであろう。

すなわち、第一は、『詩經』の篇意、また、その語句を借用し、そこに作者自身の眞意を寄託しようとする手法である。そして、この場合、作者は、その眞意が露呈するのを避けるために、借用した語句を故意に錯綜させ、いわば表現としての韜晦を試みているのである。

第二は、魏朝の中心人物であるいわゆる三曹（曹操・曹丕・曹植）の詩文の語句を借用し、これを詩中に鏤めることによって、その作品が

魏朝に關連する內容を詠うものであることを、暗示しようとする手法である。

第三は、主として堯舜禪代に關する故事を用いて漢魏禪代・魏晉禪代のことに譬え、また、漢魏禪代の際のことを借りて、魏晉禪代のことを暗示しようとする手法である。そして、この場合、政權授受の方式としての禪讓と讖緯思想とが不可分の關係にあることから、讖緯に示される事象が用いられていることにも、私たちは注意すべきであろう。

以下、これら三種の手法が、どのように詩中に具現されているかについて、逐次論述を試みたいと思う。

まず、第一の、『詩經』の篇意、また、その語句の用い方についてであるが、すでにこれに關し、私は四言「詠懷詩」の〈其一〉および〈其三〉の詩を對象としつつ、若干の考察を加えたことがある。[3] 今、その概略を述べるならば、次のようになるであろう。

すなわち、阮籍は三家詩中の「魯詩」を學んだ人のようであるから、彼の作品に引用されている『詩經』に關連する問題を考える場合には、できるだけ「魯詩」の遺說によることが望ましい。また、阮籍が『詩經』の「興」を借用する際、往々にして、引用しようとする眞の典據を讀者の眼から隱蔽するために、他の詩篇にある同一または類似の語句を、いわば擬裝典據として用いることがある。また、同じ目的から、例えば「喬（橋）松」とあるべき『詩經』の語を、敢て「高松」と書き換え、あたかもその語が『詩經』によるものではないかのように擬裝することがある。

それでは右に述べたような手法は、はたして〈其一〉〈其三〉の詩以外の作にも見られるものであろうか。この點につき、〈其七〉の詩を例として、次に考察を加えたいと思う。

朝雲四集　朝雲は四より集ひしに
日夕布散　日夕に布き散りぬ
素景垂光　素景　光を垂れ
明星有爛　明星　爛たる有り
肅肅翔鸞　肅肅として翔ける鸞よ
雍雍鳴雁　雍雍と鳴く雁よ
今我不樂　今　我樂しまずんば
歲月其晏　歲月　其れ晏る
姜叟毗周　姜叟は周を毗け
子房翼漢　子房は漢を翼く
應期左命　期に應じて命を左け
庸勲靜亂　勲を庸て亂を靜む
身用功顯　身は功を用て顯れ
德以名讚　德は名を以て讚へらる
世無曩事　世に曩の事無く
器非時幹　器は時の幹に非ず
委命有□　命に委ねて□有り
承天無怨　天を承けて怨無し
嗟爾君子　嗟　爾　君子よ
胡爲永歎　胡爲れぞ　永歎するや

右の詩の解釋で、まず問題となるのは、冒頭六句の敍景——朝、山

から涌出した雲が、夕方には四散し、やがて夜空に月が昇り、そして明星輝く拂曉の空を、鸞や雁の鳥が鳴き交わしつつ翔けてゆく――により、作者が何を表象しようとしたのか、ということであろう。そして、結論から先に述べるならば、これは、魏朝が人材登用を誤ったことにより傾頽し、これに代って司馬氏の晉朝が創建されようとしていること、また、こうした時世の變遷に順應して生きる作者自らの姿を、「翔鸞」と「鳴雁」の語に託して述べた、高度に象徴的な詩句であると思う。そのように私がこれを解する理由を、以下に説明しよう。

まず、「朝雲四集、日夕布散」という冒頭二句の「興」の所在がはなはだ把捉しがたいので、この點から検討を始めることとしたい。

『周易』上經の乾の卦辭「乾、元亨利貞」を解釋する「彖傳」の文に、「雲行雨施、品物流行」とあるように、元來、雲が恵みの雨をもたらすことは、天の德の流通する具體的現れと考えられていたようである。そして、雲は山の含藏する精氣が石に觸れることにより涌出するとされていたようで、このことは例えば、『春秋公羊傳』僖公三十一年の條に、「觸石而出、膚寸而合、不崇朝而徧雨乎天下者、唯泰山爾」といい、また、「春秋緯」の一つである『春秋元命包』に、「山者氣之苞、所以含精藏雲、故觸石而出」と説き、さらに、『尚書大傳』巻二に「五嶽皆觸石而出雲、扶寸而合、不崇朝而雨天下」と述べていることなどに徴しても明らかであろう。それでは、雲が天に瀰漫しながら、なお恵みの雨を降らせるには至らないという事象の場合、これを古人はどのように解釋したのであろうか。『漢書』の「五行志」下之上では、次のようにいう。

「皇之不極、是謂不建」皇、君也、極、中、建、立也。人君貌言視聽思心五事皆失、不得其中、則不能立萬事、失在眊悖、故其咎眊也。王者自下承天理物。雲起於山而彌於天、天氣亂、故其罰常陰也、一曰、上失中、則下彊盛而蔽君明也。……皇極之常陰、劉向以爲春秋亡其應。一曰、久陰不雨是也。（傍點は筆者、以下同じ）

右の記述は、漢の夏侯勝が霍光、張安生に奉った『洪範五行傳』中の「皇之不極、厥罰常陰、時則有下人伐上」という文に對し加えられた説と思われるが、これによれば、前述のような事象は、人君の五事（貌・言・視・聽・思心）が皆失われてその中正を得ない兆し、または、その故に臣下が君を伐つ兆しとされているものである。そして、「五行志」のこのような解釋と似て、山から涌出し天に瀰漫しながら雨を降らせることのない雲を小人に譬える説が、實は『詩經』の曹風「候人」の詩の「鄭箋」にも見える。すなわち、それは、「薈兮蔚兮、南山朝隮」の二句につき、「毛傳」がこれを「薈蔚、雲興貌、南山、曹南山也、隮、升也」と解釋するのを承け、さらに、「薈蔚之小雲、朝升於南山、不能爲大雨、以喩小人雖見任於君、終不能成其德教」と敷衍して述べるものである。

清の王先謙（一八四二―一九一七）は、その『詩三家義集疏』巻十二において、右の「鄭箋」の説が、「齊詩」の義を用いるものと推斷し、その根據として、「齊詩」を繼承する漢の焦贛の『易林』の「履之恒」に、「潼溺蔚薈、膚寸來會、津液下降、流潦滂沛」といい、また、同じく「齊詩」を習うとされる後漢の荀爽（一二八―一九〇）が、『周易』の「需」の卦に注して、「雲上升極則降而爲雨、故詩曰、朝隮于西、崇朝其雨」（「詩曰」以下は、鄘風「蝃蝀」の詩の二句。―筆者）ということなどをあげている。

ところで、「毛序」は「候人」の詩を、曹の共公姫襄が君子を遠ざ

け小人を近づけたのを刺譏した歌であるとする。そしてまた『春秋左氏傳』僖公二十八年の條の、晉侯（文公）が曹の共公を攻め、賢臣僖負羈を國政に用いず、「乘軒者三百人」（杜注云、言其無德居位者多）を用いたことを責めた事件こそ、「候人」の詩に「彼其之子、三百赤芾」と詠われていることに當たるのであるとする説も、唐の孔穎達の『毛詩正義』、また、宋の朱熹の『詩集傳』などにより主張されているのである。「候人」の詩を曹の共公と關連させて説くことは、そのことがらの眞僞はともかくとして、古くから行われていたのであろう。

さて、以上に論述してきたことを踏まえ、阮詩の「朝雲」の二句の典據を索めるとするならば、「五行志」の説と「候人」の詩の「毛序」「毛傳」「鄭箋」のそれと、いずれに妥當性を認めるべきであろうか。私見としては、「朝雲」ということばが文意として明瞭に表されていること、そして、「曹」という魏朝を想起させる固有名詞が現れること――『春秋左氏傳』の記事と「候人」の詩とに關連性を認める立場をとるならば、司馬氏を想起させる「晉」という固有名詞が現れることもこれに加えてよいであろうが――などから、「候人」の詩とその「毛序」「毛傳」「鄭箋」の説を、より妥當性の高い典據として認めたいと思う。遺憾ながら、「候人」の詩についての「魯詩」の説というものは、遺存していない。人材登用を誤った魏朝の傾頽することをいうとするのが、この二句についての私の結論である。

次に、「朝雲」の二句に續く「素景垂光、明星有爛」の二句が含む寓意について考えることとしたい。

『文選』卷三十に載せる齊の謝朓（四六四―四九九）の「和王著作八公山詩」の「戎州昔亂華、素景淪伊穀」という句について、唐の李善が「素景は晉を謂ふなり」と注し、その根據として晉の干寶の『搜神記』に「金は晉の行なり」ということばを引用しているように、「素景」（白い光、月）は、五行相生説で金德の王者とされる晉朝を表すものである。とするならば、「素景垂光」という句は、晉朝が創建されることを暗示するものと解されるであろう。

さて、鄭風「女曰雞鳴」の詩の第一章に、「子興視夜、明星有爛」とあるのを引用したのが、次の「明星」の句である。その「女曰雞鳴」の「明星」の句に對し、「毛傳」はこれを「小星の已に見えざるを言ふなり」と解している。この句についての「魯詩」の説は遺存しないが、假りに「毛傳」の解と「魯詩」の説とが一致するものとすれば、阮詩のこの一句は、魏朝において司馬氏と威勢を競う者がすでに全く絶え、その擅權體制が確立したことを暗示するものと解することができるであろう。

それでは、續いて阮詩の第五・六句「肅肅翔鸞、雍雍鳴雁」の分析に移ることとする。

まず、この二句の典據について述べよう。

この二句と類似する表現を含んでいる『詩經』の作品として、次の三篇が擧げられる。

○唐風「鴇羽」の第一章

肅肅鴇羽、集于苞栩、王事靡盬、不能蓺稷黍、父母何怙、悠悠蒼天、曷其有所。

○小雅「鴻雁」の第一章

鴻雁于飛、肅肅其羽、之子于征、劬勞于野、爰及矜人、哀此鰥寡。

○邶風「匏有苦葉」の第三章

雝雝鳴雁、旭日始旦、士如歸妻、迨冰未泮。

第一の「鴇羽」（「鴇」は雁の類。―筆者）の詩を、「毛序」では、君子が征役に驅り出され、父母に孝養を盡くすこともできない亂世を刺る歌とする。そして、その首二句を「興なり」とする「毛傳」を承け、「鄭箋」は次のようにいう。

興者、喩君子當居安平之處、今下從征役、其爲危苦、如鴇之樹止然。

すなわち、通常樹に止まらぬ鴇が樹に止まっていることを以て、君子が不慣れな征役に從う危險苦勞を譬えたものと解している。

第二の「鴻雁」の詩を、周の宣王が、離散した民をよくねぎらい歸還させ、その生活を安定させたのをほめる歌であるとするのが、「毛序」の說である。また、その首二句を「毛傳」は「興なり」という。そして、これを承けて「鄭箋」は次のようにいう。

鴻雁知辟陰陽寒暑、興者、喩民知去無道就有道。

すなわち、陰陽寒暑を避けることを知っている鴻雁を以て、無道を去り有道に就こうとする民を譬えたものと解している。ところで、右の二篇についての「魯詩」の說は遺存していない。

第三の「匏有苦葉」の詩の「鳴雁」の句が、阮詩の第六句の典據であることは、その表現から見ても疑問をさしはさむ餘地はないであろう。また、「雝雝鳴雁」の句が、「旭日始旦」という朝日のさし昇る景を詠う句に續くことも、典據とするのに適切な條件というべきである。なぜならば、この景が阮詩の「明星有爛」の句と巧みに結びあい、共鳴する効果をもつと考えられるからである。

阮籍の「東平賦」に「顧杲日之初開兮、馳曲陵而飾容」という句がある。そして、この「杲日」（衛風「伯兮」の詩の「杲杲出日」から出る語）の語が、新たな權力者司馬氏を暗示するものかと疑われることを考えるとき、作者が、「明星」の句により司馬氏を暗示し、次いでその帝位に登ることを豫想しつつ、これを象徴するにふさわしい「旭日始旦」の句をもつ「匏有苦葉」の詩を典據として選んだとするのは、あながち無理な推論ではあるまい。

ところで、「匏有苦葉」の詩の第一・四章は、それぞれ次のような文である。

○匏有苦葉、濟有深涉、深則厲、淺則揭。
○招招舟子、人涉卬否、人涉卬否、卬須我友。

『論語』の「憲問」篇に、孔子が衛にいて磬を擊ったとき、賣を荷う者がこれを評したことばの中に、右の第一章の「深則厲、淺則揭」という文が引かれていることから、王先謙は、この詩の古說では、「まさに時に隨って己を仕ふべき義を明らかにす」る歌としたのである、と述べている。彼はまたさらに、「魯詩」を學んだとされる後漢の張衡（七八―一三九）の「應閒」の文に、「深厲淺揭、隨時爲義、……捷徑邪至、我不忍以投步、干進苟容、我不忍以歙肩、雖有犀舟勁檝、猶人涉卬否、有須者也」とあるのにより、「魯詩」の說が、前述の古說に合致するものであることを指摘している。

さて、以上の檢討の結果、阮詩の第五・六句について、私は次のように考える。

すなわち、この二句は、「匏有苦葉」の詩についての「魯詩」の說により案出されたもので、作者はこれに、時に隨って自在に出處進退する意を寓しているのである。つまり、第五句の寓意は第六句と同じで、その表現が「鴇羽」「鴻雁」の詩を典據とするもののように見えるのは、眞の典據の所在を攪亂・曖昧化する効果を狙っているのである。「鴇羽」「鴻雁」の詩は擬裝典據であろう。

〈其七〉の詩の冒頭六句の敍景が藏している深意と『詩經』との關連については、右の考察でほぼ解明することができたと考える。

それでは、續く第七・八句「今我不樂、歲月其晏」という表現と『詩經』との關連を、次に問題としてとりあげることとしよう。この二句と關連がありそうな『詩經』の文を左に掲げる。

○唐風「蟋蟀」の第一章

蟋蟀在堂、歲聿其莫、今我不樂、日月其除、（後略）

○小雅「小明」の第二章

昔我往矣、日月方除、曷云其還、歲聿云莫、念我獨兮、我事孔庶、心之憂矣、憚我不暇、念彼共（恭）人、睠睠懷顧、豈不懷歸畏此譴怒。

清の陳喬樅（一八〇九―一八六九）がその『魯詩遺說攷』巻五で、「蟋蟀」の詩についての「魯詩」の說とするのは、後漢の張衡の「西京賦」に次のように見えるものである。

徒恨不能以靡麗爲國華、獨儉嗇以齷齪、忘蟋蟀之謂何。

これによって「魯詩」ではこの詩を、國君のあまりにも儉約であくせくとしているのを刺る歌としたことが明らかとなる。そして、この「魯詩」の說からすると、「蟋蟀」を阮詩の二句の典據とすることは、必ずしも適切であるとは言えないようである。

次に「小明」の詩について考察したい。

この詩についての「魯詩」の說は遺存していない。ただし「毛序」では、これを「大夫の亂世に仕ふるを悔ゆる」歌とする。また、「鄭箋」では、篇名の由來を說いて、周の幽王が「其の明を小にし」、政事を損い亂世に至ることをいうからであるとしている。

ところで、「小明」の詩の第四・五章に「嗟爾君子」という句があり、『詩經』ではこの詩にだけ見えるものである。そして、作者はこれを、〈其七〉の詩の末尾に引用している。「毛序」「鄭箋」の解釋と「嗟爾君子」の句を引用することから見て、阮詩の二句の典據を「小明」の詩であるとしてよいであろう。

これを要するに、作者は、第七・八句を一見「蟋蟀」の詩に據るものであるかのように擬裝し、そして、「今我不樂」の句をその詩から借用しながら、實は、亂世に仕えることに對する憂悔の情という、より切實な意を含む「小明」の詩を眞の典據とし、「歲月其晏」ということばを吐いたものと考えるのである。

阮籍が、『詩經』の篇意、「興」、そして語句などを、いかに自在に操作しているかという點に關しては、〈其七〉の詩を例としただけではあるが、以上でほぼ論じ盡くしたと考える。

黃節は次のように述べている。

景死而人活、若以當前之景、寫出內在之情、則所謂死景者亦將變而爲生動爲有情矣。此詩之所由生也。如四言詠懷其一、首數語純爲寫景、忽緊接『感時興思、企首延佇』二句、乃將上所說諸景落到自己身上、便覺有生氣、景中有情、情中亦有景、更拆不開。（『讀阮嗣宗詩札記』）

阮詩に純粹の敍景があるとする右の見解には賛成できない。なぜならば、それは何事かを暗示するために構成された景であると考えられるからである。

二

阮籍の第二の手法、――すなわち、曹操（一五五―二二〇）・曹丕（一八七―二二六）・曹植（一九二―二三二）の詩文の語句をその詩中に借用

することにより、その作品が魏朝について詠ったものであることを暗示しようとすること――を説明するために、まず、〈其二〉の詩を例示する。

月明星稀　　月明らかに星稀に
天高氣寒　　天高く氣寒し
桂旗翠旌　　桂の旗と翠の旌
珮玉鳴鸞　　珮玉と鳴鸞と
濯纓醴泉　　纓を醴泉に濯ひ
被服蕙蘭　　蕙と蘭とを被服す
思從二女　　思ふ　二女に從ひ
適彼沅湘　　彼の沅と湘とに適かんと
靈幽聽微　　靈は幽にして聽は微なり
誰觀玉顏　　誰か玉顏を觀ん
灼灼春華　　灼灼たる春の華
綠葉含丹　　綠葉は丹きはなを含みしを
日月逝矣　　日月逝けり
惜爾華繁　　爾が華の繁きを惜しむ

右の詩を表面的に解釋するならば、秋夜、作者が盛裝し、堯の二女娥皇と女英に從い、沅湘のほとりに舜に會いに行くが、期待は裏切られ、徒らに青春の歲月の過ぎ去るのを傷んだ作ということになるであろう。そして、この場合、末尾の句の「爾」とは、二女を指していると考えられる。

ところで、劉向の『列女傳』などに傳えられるように、舜は蒼梧の野で死に、その二妃は江湘の間で死んだのであるから、二妃は舜に從わなかったのであるとする議論が、『禮記』の「檀弓・上」篇をはじめとして、古來行われてきた。また一方では、後漢の王逸のように、二妃は舜の有苗征伐に從う途中死んで湘水の神湘夫人となったと說く者もある。さらには、「秦始皇本紀」の「索隱」（唐の司馬貞）のように湘夫人が二妃であるならば、湘君は舜でなければならないとする考えもある。作者は、〈其二〉の詩で、司馬貞のように舜を湘君と考えていたのではないであろうか。

さて、前述のような解釋に立つとき、〈其二〉の詩は、二女が舜を慕うことに託して、賢人が君を思って容れられぬ、いわゆる賢人失志を詠う作品であるように見える。黃節のこの詩に對する解釋が、すでにその例である。

節案、宋玉悲秋思君之辭、九辯曰、仰明月而太息兮、步列星而極明、又曰、惟其紛糅而將落兮、恨其失時而無當、嗣宗此篇蓋有同感。

『楚辭』の「九辯」「九歌」などの諸篇のことばが鏤められているという點で、この詩が『楚辭』的色彩の濃い作品であることは、一應首肯できる。しかし、一方、この詩に嵌めこまれている曹操・曹植の詩文の語句に注目するとき、私は、これを單なる賢人失志を詠う作品とは見なすことができない。次に、この詩の語句と重複する曹操・曹植の詩文の語句の中、主なものを指摘することとしよう。

(A)曹操「短歌行」：月明星稀、烏鵲南飛。
(B)曹植「洛神賦」：左倚采旄、右蔭桂旗。
(C)曹植「九詠」：結萍蓋兮翠旌。
(D)曹植「洛神賦」：鳴玉鑾以偕逝。

(E)曹植「洛神賦」：從南湘之二妃。
(F)曹操「祀故太尉橋玄文」：靈幽體翳。
(G)曹植「洛神賦」：轉眄流精、光潤玉顏。
(H)曹植「王仲宣誄」：文若春華、思若涌泉。
(I)曹植「閨情詩」：妖姿豔麗、蓊若春華。
(J)曹植「宜男花頌」：其曄伊何、綠葉丹花。
(K)曹植「王仲宣誄」：誰謂不傷、華繁中零。

右の諸語句中、(A)曹操「短歌行」の「月明星稀」の句は、最も重要な意味をもつものと考えられる。これは、月明の秋夜の景を表しているが、〈其二〉の詩中においては、前章で「素景垂光」という句を解釋したときすでに指摘したように、司馬氏の威光が天下を支配していることをも暗示している可能性があるからである。

さて、ここで、〈其二〉の詩の寓意を明らかにするために、次に掲げる歴史記載を検討しなければならない。

『三國志・魏書』の「文帝紀」延康元年（二二〇）の條の裴注に引く『獻帝傳』は、「禪代の衆事を載せて曰く」として次のように記している。

○乙卯、册詔魏王禪代天下曰、「……昔虞舜有大功二十、而放勲禪以天下、……漢承堯運、有傳聖之義、加順靈祇、紹天明命、釐降二女、以嬪于魏。」

○相國歆、太尉詡、御史大夫朗及九卿奏曰、「……堯知天命去己、故不得不禪舜、舜知曆數在躬、故不敢不受、……漢朝雖承季末陵遲之餘、猶務奉天命以則堯之道、是以願禪帝位而歸二女。」

右の記載によれば、漢魏禪代が堯舜禪代の故事に倣い進められた結果、堯の二女が舜に歸した故事に倣い、獻帝の二女が魏帝曹丕に歸したのであった。そして、もし、こうした經緯を阮籍がその詩に用いたとするならば、〈其二〉の詩に現れる「二女」は、舜に歸した堯の二女であるとともに、魏帝に歸した獻帝の二女を譬えたものと考えられるであろう。さらに、詩中で作者が會うことを期待した人物は、湘君となった舜であるとともに魏帝でもあり得ることとなるであろう。そして、また、詩中で「爾」という語を用いて呼ぶ相手は、「二女」ではなく、魏帝に比喩された魏朝そのものと考えるのが妥當のようである。

結局、〈其二〉の詩は、春華のごとく將來大きく實るべき希望を自らの中に含みながら、短命のままに泯絶の日を迎えようとしている、魏朝の運命を惜しんだ作だといえるであろう。

三曹の詩文の語句を用いる手法について、さらに〈其十一〉の詩を例として考察しよう。

我徂北林	我　北林に徂き
遊彼河濱	彼の河濱に遊ぶ
仰攀瑤幹	仰いで瑤幹に攀ぢ
俯視素綸	俯して素綸を視る
隱鳳棲翼	隱れたる鳳は翼を棲はせ
潛龍躍鱗	潛める龍は鱗を躍らす
幽光韜影	光を幽し影を韜み
體化應神	化を體し神に應ず
君子邁德	君子は德に邁め
處約思純	約に處り純を思ふ
貨殖招譏	貨殖は譏りを招き

篁瓢稱仁	篁瓢は仁と稱せらる
夷叔採薇	夷叔　薇を採り
清高遠震	清高　遠く震ふ
齊景千駟	齊景　千駟あり
爲此埃塵	此れが爲に埃塵とせらる
嗟爾後進	嗟　爾　後進よ
茂茲人倫	茲の人倫に茂めよ
蓽門圭竇	蓽門と圭竇と
謂之道眞	之れを道眞と謂ふ

〈其二〉の詩と同様、右の〈其十一〉の詩でもまた、前半八句の解釋に検討を要する問題があるようである。その八句の大意を述べれば、次のようである。

すなわち、作者が北林に行き、美しい木の幹に攀じたところ、その幹に鳳鳥が翼をやすめており、また、河濱に遊び、白い釣糸を見たところ、その水中に龍が鱗を躍らせていたというのである。そして、彼ら隱鳳と潛龍とは、今その才能の輝きを消し姿をつつみ隱し世に現れることはないが、それが時に應じ自在に變化し得る、彼らのすぐれたあり方であると述べている。

さて、それでは、作者が見たという「隱鳳」「潛龍」とは、どのような意を寓しているものであろうか。

黄節がすでに指摘しているように、この二語は、曹植の「文帝誄」に由來するものと思われる。言うまでもなく、「潛龍」という語は『易經』に見えるものであるが、これに對應する「隱鳳」ということばは、曹植のその文以外に典據を見出すことができないようである。

「文帝誄」では、これらのことばを左のように用いている。

禮樂廢弛、大行張之、仁義陸沉、大行揚之、潛龍隱鳳、大行翔之、疏狄退康、大行匡之。（「大行」は「大行皇帝」の意）

趙幼文『曹植集校注』（一九八四年、人民文學出版社）では、「潛龍隱鳳」を「謂才能之人而沈淪莫顯者」と解している。この解釋に、私も同意したいと思う。

これを要するに、〈其十一〉の詩の前半八句は、作者自身を含め、魏朝終末期の暗黑の世を生きる善意の人々が、その處世において、自らの才智と眞實とを韜晦し、時流に合わせ變幻自在であるより外に方途のないことをいうものであろう。

四言「詠懐詩」は、曹植の「文帝誄」と用語面で共通することが多い。〈其十一〉の詩では、「隱鳳」「潛龍」の語以外に、詩の末尾四句に用いる「人倫」「道眞」という語も、「文帝誄」で次のように用いられている。

皓皓太素、兩儀始分、中和產物、肇有人倫、爰暨三皇、寔秉道眞。

こうした兩者間の用語上での關連性だけからしても、阮籍が「文帝誄」を意識的に取り入れているのではないか、という想定は成立するように思う。

なお、この詩の後半の内容は、德行に勉め貧窮に甘んじる君子の生き方こそ、名を遺すみちであると述べ、それを後進に勸めているものである。しかし、本章での論旨と直接關連しないと思われるので、詳しい内容についてはこれを省略することとしたい。

以上見てきたように、四言「詠懐詩」の語句で、三曹の詩文のそれを典據としているもの、あるいは、それと共通ないし類似しているものは、はなはだ多い。これは、黄節もすでに部分的にではあるが、そ

の注で明らかにしているところである。

それでは、阮籍が、魏朝について詠ったものであることを暗示しようとする明瞭な意圖の下、その語句を借用していると推察される三曹の作品としては、いったいどのようなものを擧げるべきであろうか。私見によれば、そうした作品は、次の三つのパターンに屬するとすることができるであろう。

第一に、曹操の「短歌行」のようにはなはだ著名で、その一句を借用すれば、魏朝全體を暗示し得る類いの作品。

第二に、魏朝内部でかつて行われたことがらを語っている作品、あるいは、そのことがらを想起させるような作品。例えば、曹丕の「與朝歌令吳質書」（『文選』卷四十二所收）がこれに該當するであろう。これは、曹丕が諸文士とかつて遊宴した、いわゆる「南皮之遊」を追懷したもので、その文中に作者が「樂往哀來、愴然傷懷」と感慨を述べている句がある。そして、私は、〈其十三〉の詩の「樂往哀來、悵然心悟」という句が、曹丕のその句をもじったもので、かつて君臣の間にうちとけた交遊のあったことを暗示するものではないかと推察している。

第三に、曹植の「文帝誄」を中心とする「誄」の文章。この類いの文章の語句を借用することそれ自體が、魏朝の泯絶を暗示しているという、象徴的な意味をもつであろうと思う。

魏の應璩（一九〇―二五二）の「百一詩」が同時代の曹丕の「典論」のことばを典據とすることについては、吉川幸次郎氏によってすでに指摘されている。[5] 阮籍が彼のすぐ前の時代の三曹の詩文のことばを用いているのは、應璩のこの手法を繼承するものと見なすことができよう。

三

阮籍が彼の第三の手法を、四言「詠懷詩」の作品にどのように運用しているかということについては、すでに一部言及した。

ところで、漢魏禪代および魏晉禪代の際のことがらに關しては、晉の陳壽の『三國志・魏書』の宋の裴松之注に引かれている、晉の袁宏の『後漢紀』、『獻帝傳』、および晉の孫盛の『魏氏春秋』などの諸書に詳細な記載が見られる。そして、これらの歴史記載と阮詩の内容とを比較檢討するとき、兩者の間に疏通しあう點のあることが認められるのである。次にその點について説明したい。

漢の建安二十五年（二二〇）は、正月を以て「延康」と改元された。そして、その年の十月初旬、魏國の臣僚が魏王に對し、符瑞圖讖を根據として漢帝に代わり天子の位に卽くことを勸進する。ここに漢魏禪代劇の幕が正式に切って落とされることとなった。以後、三回に及ぶ天子からの禪位の意志を表明した詔書と魏國の臣僚による勸進、そして、魏王の辭意表明が繰り返し行われた後、同月二十八日庚午、天子からの第四次の册詔と、尙書令らによる、翌二十九日に登壇の大禮を行うべき上奏があり、魏王がこれを裁可して、ことは決着した。二十九日辛未、繁陽（河南縣）に壇を築き、魏王は升壇して璽綬を受け、ついに天子となったのである。

それでは、右のような漢魏禪代の經緯を記す諸書の記載が、阮詩においてどのように織りこまれているかを、〈其五〉の詩を例として考察してみたい。

立象昭回　立てられたる象は昭らかに回り

陰陽攸經　陰と陽とは經る攸あり
秋風夙厲　秋風　夙に厲しく
白露宵零　白露　宵に零つ
脩林彫殞　脩き林は彫え殞ち
茂草收榮　茂れる草は榮を收む
良時忽邁　良時　忽ちに邁き
朝日西傾　朝日　西に傾く
有始有終　始め有れば終り有り
誰能久盈　誰か能く久しく盈たん
太微開塗　太微　塗を開き
三辰垂精　三辰　精を垂る
峨峨羣龍　峨峨としてまつりする羣龍は
躍奮紫庭　紫庭に躍り奮ふよ
鱗分委瘁　鱗の分の委ち瘁るれば
時高路清　時は高く　路は清からん
爰潛爰默　爰に潛み　爰に默さん
韜影隱形　影を韜み　形を隱さん
願保今日　願はくは今日を保ちて
永符脩齡　永に脩き齡に符はん

右の詩の前半十句の大意を述べれば、次のようになるであろう。

すなわち、日月星辰が輝きを放ちつつ天を回り、陰陽二氣が規則的に消長するのは、すべて天道のなせるわざである。人間の世界もこの大いなる原理の支配下にある。そして、今の世はあたかも脩林・茂草が凋落する秋の季節に似て、美しく盛んであったものが滅びゆく時に當たっている。しかし、良時が忽ちに過ぎ、朝日が西に傾くように、始めが有れば終りの有るのが人の世の常であり、久しく盈を持する者はありえない、と述べている。

ところで、阮詩の第十句「有始有終」という表現に酷似することばが、『魏書』の「三少帝紀」に見える。それは、正元三年（二五六）四月丙辰の日の條に、高貴鄉公髦（二四一―二六〇）が博士庾峻に『尚書』の講義を命じたことを載せる記事中、帝（高貴鄉公）のことばとして傳える「夫有始有卒、其唯聖人」という句である。これが『論語』の「子張」篇中の「有始有卒者、其惟聖人乎」という子夏のことばに據るものであることは言うまでもない。そして、高貴鄉公のことばの意味するところは、『論語』のことばのそれと一致しており、一方、阮詩の「有始有終」という句のそれとは乖離しているのである。

しかしながら私は、この詩の後半部の内容との關連から見て、阮詩のこの句が高貴鄉公のことばを特別な意圖を以て用いたものであると考える。おそらく阮籍は、帝位に卽きながら司馬氏の擅權を怒り、無謀の叛亂を敢行して弑虐された高貴鄉公の「克く終り有る」ことを得なかった運命を想いつつ、これを用いたものであろう。そのように考えるならば、この前半部に詠われているのは、魏朝の終局を眺めつつ、暗い時代の到來を見据えている作者の感慨であるとすることができよう。

次に詩の後半部の解釋を試みよう。まず、はじめの六句について述べてみたい。

夜空に太微の星が現われると、その軌道を掃うかのように彗星が横切ってゆき、一方、三辰（日・月・星辰）が明光を降り注ぎ、日蝕や月蝕のような不祥の兆しもなく、勢い盛んに羣龍が紫微宮に活躍する。し

かし、彼らもやがては衰え弱る時がくるであろう。その時、この人の世の路は高潔なものとなるであろう。作者は以上のように述べている。

それでは、ここに語られていることの深意は、いったいどのようなところにあるのであろうか。

すでに前述した『獻帝傳』に、太史丞の許芝という者が、魏の漢に代わるべきことが讖緯に示されているとして魏王に條奏した記載が見える。それによれば、王朝の交替は七百二十年を一軌とし、漢朝高祖の受命の兆徴は獲麟に始まり、今に至るまですでに七百餘年を經ているから、天の暦數はまさに盡きようとしている。このことは天文に明らかに現れており、すでに四十餘年前、「太微中、黄帝（魏）坐常明而赤帝（漢）坐常不見、以爲黄帝興而赤家衰、凶亡之漸」ということであったとし、なお、次のようにいう。

建安十年、彗星先除紫微、二十三年、復掃太微。新天子氣見東南以來二十三年、……殿下卽位、初踐阼、德配天地、行合神明、恩澤盈溢、廣被四表、格于上下。是以黄龍數見、鳳皇仍翔、麒麟皆臻、白虎效仁、前後獻見于郊甸、甘露醴泉、奇獸神物、衆瑞並出。斯皆帝王受命易姓之符也。……夫得歲星者、道始興。……今兹歲星在大梁、有魏之分野也。

また、同じく『獻帝傳』に記載する尚書令桓階等の魏王への上奏にいう。

漢氏衰廢、行次已絶。三辰垂其徴、　史官著其驗、　耆老記先古之占、百姓協歌謠之聲。

「彗星」が「太微を掃ふ」といい、また、「三辰其の徴を垂る」という『獻帝傳』の記載が、阮詩の「太微開塗、三辰垂精」という表現に符合すると考えることは、必ずしも妥當性を缺く推論ではないであろう。

次に「峨峨羣龍、躍奮紫庭」の二句であるが、これは、魏帝に代わり天子となろうとする晉王の臣僚が、その祭祀を助けるため宮廷に活躍することを暗示したものと思われる。「峨峨」という語は、『詩經』の大雅「棫樸」に「奉璋峨峨、髦士攸宜」というのを典據としている。そして、この「棫樸」の二句は、周の文王の祭祀を助ける俊士を詠うもので、『爾雅』の「釋訓」では、「峨峨、祭也」と解釋している。また、「羣龍」とは、「棫樸」にいう「髦士」のように王者を助ける臣僚を意味する語と思われる。このような臣僚の活躍する「紫庭」が、宮廷をいう語であることは言うまでもないであろう。

さらに、「鱗分委萃、時高路清」という二句は、眼前に活躍する晉王司馬氏の臣僚も、やがては滅びる運命にあるから、その時、世は高く清らかとなるであろうと述べるものと思われる。そして、以上のような詩意を承け、今はただ自己の眞實の姿を韜み隱し、今日の生命を保全することにより、脩齡へのみちに合致したいという作者の願いを語っているのが、末尾四句である。

これを要するに、〈其五〉の詩は、漢魏禪代の際の歴史記載と高貴鄉公のことばとを織りこみながら、高貴鄉公弑虐の後、晉朝創建に奔命する人々と欺瞞に滿ちた時代相とを語り、そのような世での自己の生き方を述べたものということができるであろう。

それでは次に、『魏氏春秋』の記載と阮詩の内容とが符合するのではないかと思われる一例をとりあげて、考察を加えたい。〈其八〉の詩を掲げる。

日月隆光　　日月は光（かがや）きを隆（さかん）にし

克鑒天聰　　克く天聰を鑒らす
三后臨朝一作軒　　三后　朝に臨み
二八登庸　　二八　登庸せらる
升我俊髦　　我が俊髦を升し
黜彼頑凶　　彼の頑凶を黜く
太上立德　　太上は德を立て
其次立功　　其の次は功を立つ
仁風廣被　　仁風　廣被し
玄化潛通　　玄化　潛通す
幸遭盛明　　幸に盛明に遭ひ
覩此時雍　　此の時の雍ぐを覩る
棲遲衡門　　衡門に棲遲し
唯志所從　　唯志にぞ從ふ所き
出處殊塗　　出づると處ると塗を殊にし
俯仰異容　　俯すると仰ぐと容を異にす
瞻歎古烈　　古の烈を瞻ては歎じ
思遺高蹤　　高き蹤に遺かんことを思ふ
嘉此箕山　　此の箕山を嘉し
忽彼虞龍　　彼の虞龍を忽にせん

右の詩の要旨を述べるならば、以下のようになるであろう。

すなわち、堯・舜・禹の三后の世、それは、日月が天子の聰明さを輝かし、八元・八愷が登庸されるうまし世であった。今、わが魏朝は三后の世に似て、すぐれた人材を登庸し、政府に弓引く頑凶の徒をしりぞけた。「太上は德を立て、其の次は功を立つ」というが、今こそ仁風が廣く被い、玄化が潛通する德敎の世といえよう。私は幸にも盛明の世にあい、時世のやわらげるさまを見ることができた。このうえは、隱棲し志の欲するままに生きたい。出仕と隱棲とはみちを異にするから、それに應じて振舞いも自ら容態を異にすることとなる。古の人のいさおしにあこがれ、その高き生き方にならいたい。そして、かの許由をたたえ、一方、この虞龍をさげすみたい。

以上、いささか冗長の文を連ねた。しかし、これによっても、右の詩が、時勢に對しほめことばを弄しつつ、實は、痛烈に皮肉るものであることが明らかになるであろう。

それではいったい、これは誰を刺るものであろうか。ここで、「三少帝紀」の裴注に引かれる『魏氏春秋』の記載に注目しよう。

正元三年二月丙辰の日、高貴鄉公は侍中荀顗らの羣臣と太極殿の東堂に宴し、談たまたま帝王の優劣の差に及び、帝は夏の少康が漢の高祖に優ることを主張し、次のように言った。

……且太上立德、其次立功、漢祖功高、未若少康盛德之茂也。

（後略）

右の文の「太上立德、其次立功」ということばが、『春秋左氏傳』襄公二十四年の條の穆叔（叔孫豹）のことば、「大上有立德、其次有立言」から出ることは、黃節の指摘するとおりである。しかし、また一方、阮詩の二句が高貴鄉公のことばを特別な意圖を以て引くものと想定するならば、その意味するところは、『春秋左氏傳』を典據とすると考える場合より、はるかに含蓄に富むことになるのではなかろうか。

そしてさらに、右のように考えるとき、詩の末尾にいう「虞龍」とは、舜の臣虞龍が「納言」の官にあったことから、尙書の官にあった

者を指しているとしなければならない。なぜならば、『漢書』の「百官公卿表」の「龍作納言、出入帝命」という文で、後漢の應劭が「納言、如今尚書、管王之喉舌也」と注するように、納言とは後漢・魏の尚書に相當すると解されるからである。

私見によれば、「虞龍」とは、甘露五年（二六〇）五月己丑の日、司馬昭の壓迫に抗して弑虐された高貴鄉公に對し、その無謀を諫め、ついに事に坐して誅された尚書の王經その人ではないかと推測されるのである。「三少帝紀」のその條に裴注が引く諸書を拔萃しよう。

○漢晉春秋曰、帝威權日去、不勝其忿。乃召侍中王沈、尚書王經、散騎常侍王業、謂曰、司馬昭之心、路人所知也。吾不能坐受廢辱、今日當與卿等自出討之。王經曰、……今權在其門、爲日久矣、朝廷四方皆爲之致死、不顧逆順之理、非一日也。且宿衞空闕、兵甲寡弱、陛下何所資用、而一旦如此、無乃欲除疾而更深之邪。禍殆不測、宜見重詳。……沈・業奔走告文王、文王爲之備。（後略）

○世語曰、王沈、王業馳告文王、尚書王經以正直不出、因沈・業申意。

○晉諸公贊曰、沈・業將出、呼王經。經不從、曰、吾子行矣。

以上の考察から、私たちは次のように言うことができるであろう。すなわち、〈其八〉の詩は、高貴鄉公弑虐後の司馬氏による擅權體制の欺瞞性を皮肉り、自らの隱棲への志向を表明した作品である。そして、忠義を貫いて誅死した王經の行爲を、作者が生命をないがしろにした愚行として刺譏していることに、私は注目したいと思う。

ところで、黃節は次のようにいう。

嗣宗詩多微詞、吾人須于言外見其眞意。如四言其一：『於赫帝朝伊衡作輔。』以伊尹比司馬師。又其八：『三后臨朝、一八登庸。』隱以堯舜比方晉初、外若頌諛、實是規諷。蓋擬不以倫、便成笑駡。（「讀阮嗣宗詩札記」）

これによって私たちは、黃節が堯舜禪讓を以て魏晉禪代に譬えるという阮籍の手法にすでに氣付いていたことを知ることができる。しかし、この章で見たようなその手法の複雜さに對し、黃節はおそらく知ることがなかったであろうと思われる。

結　語

蕭滌非氏は、次のようにいう。

阮詩之難通也舊矣。文心云：『阮旨遙深。』詩品謂『厥旨淵放、歸趣難求、延年注解、怯言其志。』蓋其命意遣辭、窮極變化、而造懷指事、興寄無端、風格高古、形態萬千。後之學步邯鄲者、斯未得其髣髴、而淺見寡聞之士、又以眩於故實、難於檢討、亦復望而生畏。（「讀阮嗣宗詩札記」）

「詠懷詩」が、その發想・表現においてきわめて變化に富みかつ自在であり、そのため古來「遙深」「淵放」などと評されてきた作者の旨意は、讀者の理解を拒むように見えたのだ、と右の文は指摘している。そして、蕭氏の「札記」に記されている黃節の說は、次のようである。

阮詩爲詩中最難理解者。揆其故、蓋有二焉：其一環境之關係。嗣宗於魏室、心懷眷戀、而不敢明詆晉室、以招非命、故一出之以隱語、迷離恍惚、莫可究詰。其二用典之關係、漢魏詩用典本極隨便、全憑一時記憶、信手拈來、故多與原來故事不同。詠懷詩中此類尤多、非細心尋繹、殆難究其指歸也。如其四十二詩『園綺遯南

岳、伯陽隱西戎。』以終南山爲南岳、以流沙之西爲西戎、卽其例也。（同前）

ところで、私の四言「詠懷詩」についての考察によれば、「隱語」は必ずしも「究詰す可き莫し」ではなく、「用典」も「一時の記憶に憑り、手に信せて拈來し」てはいない。「隱語」と見えることばも、實は三曹の詩文、『魏書』の裴松之の注、また、『漢書』の「五行志」などに典據を有するのであり、「用典」も「魯詩」の說や擬裝典據を用いているだけに過ぎないのである。要するに、阮籍の用いる手法が、あまりにも老獪、巧妙、細心にしてかつ大膽であり過ぎるのである。

さて、すでに紙幅も盡きようとしているが、ここで四言「詠懷詩」と五言「詠懷詩」との關連についての概見を付記したい。

四言「詠懷詩」十三首の作品の多くは、その內容から見て、諸葛誕の亂鎭壓（甘露三年―二五八）以後、作者の死（景元四年―二六三）に至る五・六年間に制作されたものと推定される。要するに、司馬氏の擅權體制が確立し、そして、高貴鄕公が弑虐されるという事件を經て、司馬氏による魏朝簒奪が確定的となった時代が、この四言の連作の背景であった。

したがって、四言「詠懷詩」がその主要な內容として、魏朝と魏朝をとりまく人々の運命、そして一方、新しい權力者司馬氏と司馬氏に追隨する人々との生態、また、諸惡の渦卷く世相を、象徵的あるいは暗示的に描き、かつ批評・刺譏していることは、詩によって時事を寫すいわゆる「詩史」の性格をこの連作がもつことを示している。

しかし、また一方、作者の主意は、右に述べたような政爭にからむ事件や當時の世態人情のうえにだけあったのではない。阮籍は、人事に對し遠見明察をそなえた人であった。だから彼にとって、その認識について語り、また、その希望のない世をいかに生き、何を慰めとするかについて語ることも、同樣に重要なテーマであった。そしてここに、この連作が「詠懷」と題されてきた理由がある。

これを要するに、そのトータルな內容において、四言「詠懷詩」は五言「詠懷詩」に近似しているといえよう。そして、この兩者間の相異點として、前述の「詩史」的性格が、四言「詠懷詩」には濃厚に認められるのに對し、五言「詠懷詩」でははなはだ曖昧であるということが言えるように思う。

ところで、內容が近似しているということは、兩者が共通ないし近似の語彙をもっているという現象を生みだすことにつながるであろう。ここでそうした實例の一一をあげることは省略するが、共通ないし近似する語彙は多い。そこで、これらを手掛りとして、五言「詠懷詩」の寓意を探ることも可能である。その例として、「其四十二」の詩をあげたい。

王業須良輔　建功俟英雄
元凱康哉美　多士頌聲隆
陰陽有舛錯　日月不常融
天時有否泰　人事多盈沖
園綺遯南岳　伯陽隱西戎
保身念道眞　寵耀焉足崇
人誰不善始　勗能尅厥終
休哉上世士　萬載垂淸風

（傍點を付した語は四言「詠懷詩」に同じ語または近似する語が見えるもの。）

この詩は、人事が天意により支配されるあやふやなものであるからには、功を建て王業を助ける英雄良輔の得意と美名が永續しないことを言い、人の幸福は君寵を受けることにあるのではなく、四皓・老子

のように世俗をのがれ、「道眞」を守り生命を保つ生き方を持することにある、と強調している。

ところで、四言「詠懷詩」と共通または近似している「元凱」「建功」などの語と、そうした語の見える四言「詠懷詩」の作品内容とを踏まえて「其四十二」の詩を検討しなおすとき、冒頭四句が實は司馬氏の「王業」を助ける人々を指しているのではないかと疑われるのである。

しかし、また一方、近似の語句を含んでいる作品であっても、四言「詠懷詩」と異なる内容のものがある。「其二」の詩をその一例として示そう。

二妃遊江濱　逍遙順風翔
交甫懷環珮　婉孌有芬芳
猗靡情歡愛　千載不相忘
傾城迷下蔡　容好結中腸
感激生憂思　萱草樹蘭房
膏沐爲誰施　其雨怨朝陽
如何金石交　一旦更離傷

これは、『列仙傳』に載せる江妃二女と鄭交甫の話を踏まえつつ、「愛情の約束が心がわりによって裏切られることを歌う」[6]ものである。もっとも、唐の李周翰が「臣主初爲金石固交、一朝離傷使如此也」と說いているように、これを君臣間の信頼の崩壞をいう歌であるとする解釋のほうが、從來多かったであろう。しかし、その兩者のいずれの解釋によるとしても、この詩が「二女」の語を用いる四言の〈其二〉の詩の内容と異なるものであることは明らかであろう。五言の「其二」と四言の〈其二〉とは、おそらく制作時期と手法とを異にする作品であったと思われる。

最後に、手法の問題について若干の推測を述べたい。

本稿で論じた四言「詠懷詩」に用いられている手法が、五言「詠懷詩」に適用されている痕跡を見出すことは、総じてはなはだ稀であるといえるように思う。その稀な例を一つあげよう。すなわち、「其四十九」の詩の「澤中生喬松」という句が、〈其一〉の詩の「蓊鬱高松」の句とともに、『詩經』鄭風の「山有扶蘇」の「山有橋松、隰有游龍」という句にもとづくものであり、作者が「喬松」の語にすぐれた人物を象徴させる「興」の手法を用いているのがそれである。しかし、總じてこうした例は稀少であると言えよう。

思うに阮籍は、『詩經』に連なる傳統性、文章の四字句をそのまま嵌めこむことの可能なスタイル、五言にくらべ短く簡素であるだけにより象徴性・暗示性に富んでいるという、そうした諸特長をもっている四言詩であるからこそ、ここに述べたような特色ある表現手法を創出したのであろう。

阮籍の「答伏羲書」にいう。

玄雲無定體、應龍不常儀、或朝濟夕卷、翕忽代興、或泥潛天飛、晨降宵升。

右の「玄雲」「應龍」のあり方こそ、阮籍の精神の象徴であるとともに、その變化自在の表現のあり方をよく示したものであると思われる。

注(1)　清の馮舒の『詩紀匡謬』、錢曾の『讀書敏求記』巻四、袁枚の『隨園詩話』巻七などを參照。

(2)　黃節の四言「詠懷詩」に關する業績を紹介し論じた文章で筆者が參考

にしたものとして、他に龜山朗氏により翻譯紹介された蔣樂羣氏の論文（龜山朗氏「四言『詠懷詩』十三首—蔣樂羣論文について—」『武庫川女子大學紀要』第三十集、一九八二年）と劉文忠氏「關于阮籍的四言《詠懷詩》十三首」（『文獻』第十九輯、一九八四年三月、書目文獻出版社）の二篇がある。

(3) 拙稿「阮籍と『詩經』——四言『詠懷詩』を例として——」（『中國文化』1985、大塚漢文學會、昭六〇・六）

(4) 拙稿「阮籍の『東平賦』について」（『日本中國學會報』第三十六集、日本中國學會、昭五九・十）參照。

(5) 吉川幸次郎「應璩の『百一詩』について」（『京都大學文學部五十周年記念論集』昭三一・一）の「二」參照。

(6) 吉川幸次郎「阮籍の『詠懷詩』について」（下）（『京都文學報』第六冊、京都大學文學部中國語學中國文學研究室、一九五七・四）の「三の一」參照。